# 平野秀吉の生家および墓の所在と遺墨について

槇田善衛

## 一．はじめに

平野秀吉はこの数年来の調査研究により、教育者、国文学者、校歌作詞者としての業績の一端が明らかになりつつある[1][2][3][4][5]。その業績等が明らかになるのとは対照的に、生家ならびに墓の所在はわからないままである。さらに、平野秀吉の遺墨は少なく、一九八二（昭和五十七）年五月三十日（日）から六月六日（日）に旧巻町郷土資料館（現新潟市巻郷土資料館）二階特別展示室で催された「巻町が生んだ偉大な教育者、篤学の人　平野秀吉先生顕彰展」で展示された遺墨があるだけで、その記憶も風化されつつある。

そこで本研究では、本年（平成二十九年）が平野秀吉没後七十年にあたることを記念して、平野秀吉の生家と系図をあらためてまとめ直すとともに、新潟市巻郷土資料館所蔵の遺墨の調査を行い、その墓の所在を明らかにしたいと考えている。

## 二．生家

平野秀吉の家族については、次の記載がみられる[6]。

平野秀吉は、西蒲原郡巻村（今の巻町）二百九十番戸で生まれた。父は兵吉、母はソチという。平野家は、代々巻町にあった。ソチは親戚の平野冬太郎の二男兵吉を婿養子に迎え、兵吉二十八歳、ソチ三十一才の明治六年（一八七三年）六月五日、その長男として秀吉が生まれた。（略）父の兵吉は、酒好きであったが、大工として優れた技能の持ち主で、（略）。母ソチは働き者で、米の仲買い、下請けをして生計を助けていた。

このことから、平野秀吉の父は兵吉、母はソチといい、明治の初め頃、旧巻町（新潟市西蒲区）に居を構えていた。父兵吉は、母ソチの親戚である平野冬太郎の二男であり、婿養子であった。さらに、父兵吉は大工、母ソチは米の仲買、下請けを生業としていた。また、「平野家略系譜」によれば[7]、母ソチの父、すなわち平野秀吉の祖父は平野常七、祖母はネンであることが明らかとなった（図1）。

以上を踏まえて、明治七年頃の巻村上町辺地図（図2、3）でその

---

1 槇田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会,2013,pp.48-59。

2 槇田善衛「会津八一と恩師平野秀吉」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会,2014,pp.31-44。

3 槇田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会,2014,pp.45-52。

4 槇田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十八号』越佐文人研究会,2015,pp.153-173。

5 槇田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十九号』越佐文人研究会,2016,pp.148-163。

6 小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.1-2（筆者罫引）。

7 前掲6,p.93。

所在を確認すると、平野秀吉の生家である「平野兵吉」の名がみえる。また、平野秀吉の父兵吉の実家「平野冬太郎」、母ソチの実家「平野常七」の名もそれぞれ確認することができる。「山口新五郎」「平野兵吉」「大川いく」「平野常七」「八木喜蔵」の家々は、「後年、小路の拡大で無く」[8]なるが、平野秀吉の弟、亥作の子孫はこの拡張された道脇、すなわち図2、3の「平野兵吉」宅と小路を隔てた向かい側に、現在も生活を営んでいる。

## 三．墓

### （1）墓の所在

平野秀吉の墓は、「高田市寺町二丁目の浄興寺境内に建立された。」とあるだけで[9]、長らくその所在は不明であったが、筆者は過日その墓前に参拝することができた（図4）[10]。参拝に同行いただいた岩澤信氏によれば、「平野秀吉の墓は浄興寺[11]境内にあるが、至徳山浄泉寺[12]が管理しており、平野不二夫が建立したと聞いている」とある。平野秀吉の墓は国重要文化財である浄興寺本堂の正面に向かって左側の墓地にあり、墓の後面から撮影すると本堂正面に向かって左側面が写る（図5）。

### （2）墓の形状

『お墓に関することがすべてわかる　お墓と埋葬の手帳』[13]を手がかりに、平野秀吉の墓を解説する。平野秀吉の墓は和型で、墓石とカロートから構成され、墓石は上部から順番に、竿石（さおいし）、上台石（じょうだいいし）、下台石（かだいいし）と続く。またカロートは遺骨を埋葬するための施設で一般に地下に敷設されるが、平野秀吉の墓の場合、周囲がそうであるように、地上部に納骨施設が付される、丘カロートとよばれる形態をとっている。平野秀吉の墓を実測し、図示したものが図6である。図中の番号に従って説明を加えると、①は竿石、②は上台石、③は下台石、④から⑦はカロート、⑧は香立て、⑨は⑧の付属物となる。竿石の形は角碑（かくひ）型で、頭頂部の形は丸兜巾（まるときん）型となる。竿石の正面は縁取りして彫り込まれた額入（がくいり）に、「丸に蔦（つた）の家紋」とそれに続く「墓」の文字がみられる（図7）。竿石の左側面は「平野氏」（図8）、右側面は「昭和二十三年五月」（図9）とある。さらに墓は北に向くように設置されている。

### （3）その他

「平野家略系譜」によれば[14]、母ソチの父、すなわち平野秀吉の祖父は平野常七、祖母はネンであり、平野秀吉の父は兵吉、母はソチであり、平野家の墓所は旧巻町（現新潟市西蒲区）にあると考えた方がよいであろう。平野秀吉の「両親は、秀吉からの仕送りを受けて巻で平穏な晩年を送っていたが、明治三十七年[15]、秀吉が高田へ移り住んでから三年目の秋に、父兵吉が死亡した。秀吉は、母を高田に迎えて、

8　亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p365。
9　前掲6,p.26。
10　二〇一六（平成二十八）年三月二十六日（土）、平野秀吉のご令孫岩澤和子氏および岩澤信氏のご案内により参拝する。
11　真宗浄興寺派本山浄興寺。新潟県上越市寺町二丁目六―四五。
12　浄興寺（真宗浄興寺派）末寺。新潟県上越市寺町二丁目六―一〇。
13　藤井正雄『お墓に関することがすべてわかる　お墓と埋葬の手帳』小学館,2002,pp.38-53。
14　前掲6,p.93。
15　一九〇四年。

（略）。大正四年[16]、母ソチが脳溢血で急逝した」とある。浄興寺境内にある平野秀吉の墓は一九五〇（昭和二十三）年五月建立であることを考えると、平野秀吉の父兵吉、母ソチの遺骨はそれぞれ浄興寺境内の墓に葬られているとは考えにくい。調べを進めていくうちに平野家の墓は、平野秀吉の生家からほど近い長巌寺[17]にあることが明らかとなった[18]（図10）。浄興寺（新潟県上越市）境内に建立された平野家の墓は、おそらく平野秀吉亡き後、墓の必要性に迫られた秀吉の跡継ぎ、不二夫が建立したものと推察される。

## 四．遺墨

平野秀吉の遺墨は少ない。資料として『巻郷土資料館試料目録No.6 平野秀吉資料目録』[19]が詳しい。この目録は、一九八二（昭和五十七）年五月三十日（日）から六月六日（日）に開催された「巻町が生んだ偉大な教育者、篤学の人　平野秀吉先生顕彰展」の展示目録である。この目録に従い、平野秀吉の遺墨調査を、二〇一七（平成二十九）年二月五日（日）に新潟市巻郷土資料館で行った。その結果、短歌が記された半切条幅一巻、短冊三冊、料紙一枚の所在が確かめられた（図11、図12）。半切条幅には「ゆくまゝにまがれるままに瀬の音の　日半はなれぬやまちはさびし」とあり、短冊には「どどどどと雪くつれおつるおとのして　大講堂の夜は更けにけり」「くるまより船につみうつす竹のおとの　かちかちとなり聲さむきかな」「ゐならひて舞きぬたたむ小おんなの　はゝめきのひひくはるのよい更けぬ」とあった。さらに料紙には「黒百合さく鳶山に　のこる雪かたの鳥形を　みれば夏たけにけり」とあった。以上のことから、新潟市巻郷土資料館には平野秀吉の遺墨が現在でも大切に保管されていることが明らかとなった。

## 五．結び

本研究では平野秀吉の生家ならびに墓の所在を明らかにするとともに、遺墨が新潟市巻郷土資料館に所蔵されていることを確認できた。これらの成果に基づき、「偉大な教育者　平野秀吉先生」の顕彰が進むことを心より願っている。

## 六．後記

資料を整理する過程で、平野秀吉のご子息から遺墨をご提示いただいた。「巻町が生んだ偉大な教育者、篤学の人　平野秀吉先生顕彰展」で展示された、資料名「妙高の残雪を詠める長歌並短歌（全紙条幅）」[20]と考えられる[21]（図13、図14）。なお釈文等は詩集『高嶺いばら』

16 一九一五年。

17 浄土真宗本願寺派。新潟市西蒲区巻甲六九二。

18 平野秀吉亡き後は弟の亥作、その跡を継いだ勝二が墓を守っていた。勝二の子、平野恒義氏によれば、「現在の墓は、昭和四十八年四月九日の巻町大火の際に類焼したため、昭和五十年の暮れ（十一月～十二月）に、亥作の孫長男である平野国雄が再建した」とある〔平成二十八年十二月三日（土）聞き取り調査による〕。

19 巻町郷土資料館『巻郷土資料館試料目録No.6　平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,16p。

20 前掲19,p.15。

21 長歌並短歌とあるが遺墨には短歌は記されていない。

を参考に行った[22]。最後に本研究を行うにあたり、平野秀吉のご親族の皆様からは並々ならぬご協力を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

（釈文）

かきろひの　はるたけ過き
真昼影の　かけるひさす日
けぬる雪　けのこるゆきの
山ことに　さたまる形
あらはるるかも

妹か髪　田口をはなれ
西窓を　布りさけ見れは
いかしかも　たかき妙高
脇たちなす　たちさもらは勢
よろしなへ　見かほしみねの
摩訶不思議　おきあまるかに
安累不過　三千の嶽に
久らへては　わらはへ技の
うへしこそ　蘇迷盧妙高
やまつみの　これを山そと
神力　いきわめつく過
そこをしも　くしひあやしひ
敢へてわれい布

霍公鳥　なくや五月の
あしひきの　をてもこのもに
雪形の　けもの鳥むし
としごとに　たかはぬ時と

汽車いまし　関山へはしる
ゆゆしかも　大き妙高
神奈山　赤倉山を
又の名　越後富士といふ
中つみねの　眞額の上を
山といふ　大きもし見ゆ
あらはるゝ　見し雪形は
いまたしき　たは技なりけり
八萬の　みねを名におへれ
神心　いたくみきはめ
その形　そのありところ
世界一と　おしてわれい布

右残雪をよめるなか歌

平野秀吉　印

〈筆者・〒九五九―〇四一二一　新潟市西蒲区桑山三一六〉

22　平野秀吉『山嶽の歌　第二集　高嶺いばら』木曜会,1939,pp.1-4。

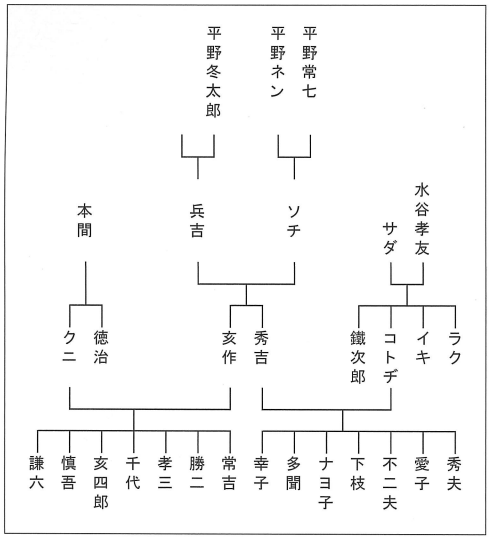



図１．平野家略系譜
　引用文献　小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,p.93。

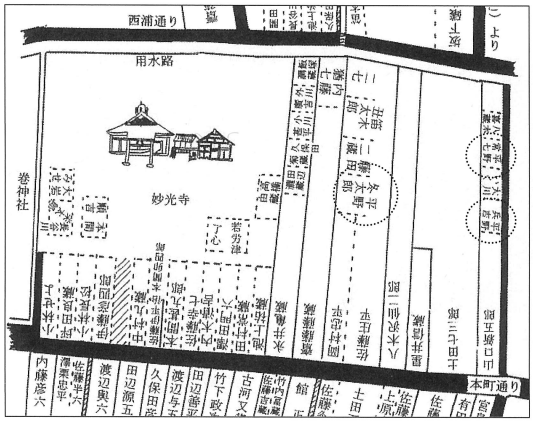



図２．明治7年頃の巻村上町辺地図（抜粋）

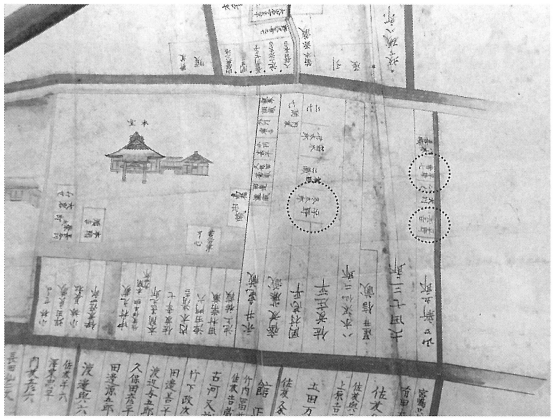


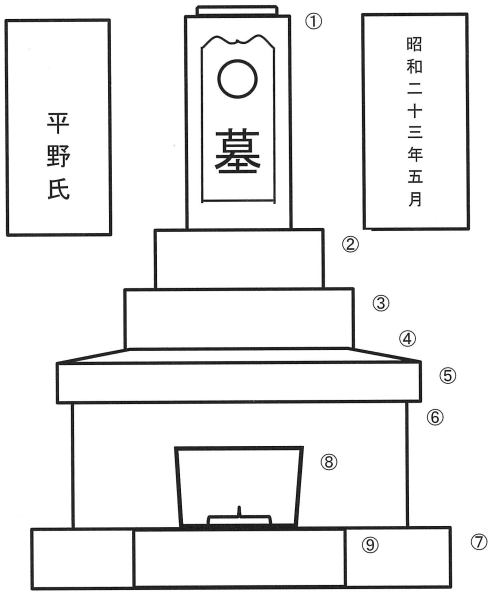
図３．明治7年頃の巻村上町辺地図（抜粋）

引用文献
図２：亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.365（一部修正）。
図３：『明治初年巻村絵圖』（新潟市巻郷土資料館蔵）。

図４．墓の前面

図５．墓の後面

図４、５、７～９は、平成28年6月11日（土）槇田撮影。




| 番号 | 縦(cm) | 横(cm) | 奥(cm) |
|---|---|---|---|
| ① | 55.5 | 26.5 | 26.5 |
| ② | 15.0 | 42.5 | 42.5 |
| ③ | 15.0 | 57.0 | 57.0 |
| ④ | 5.0 | (上)57.0, (下)90.0 | (上)57.0, (下)90.0 |
| ⑤ | 10.0 | 90.0 | 90.0 |
| ⑥ | 32.0 | 83.0 | 83.0 |
| ⑦ | 15.0 | 104.0 | 104.0 |
| ⑧ | 21.5 | (上)32.5, (下)29.0 | (上)17.0, (下)14.0 |
| ⑨ | 14.0 | 53.0 | 18.0 |
| ①～⑦合計 | 147.5 | | |

平成28年6月11日(土)槇田計測。

図6．墓の実測図

図7．竿石の正面

図8．竿石の左側面

図9．竿石の右側面

図10．平野家の墓

図10は、
平成29年2月5日(日)
槇田撮影。

図11. 半切条幅一巻134×41（本紙）

図12. 短冊三冊、料紙一枚
左より36×6，36×6，36×6，23×13。

図11、12は、平成29年2月5日（日）槇田撮影。
同年8月5日（土）槇田計測。単位はcm。

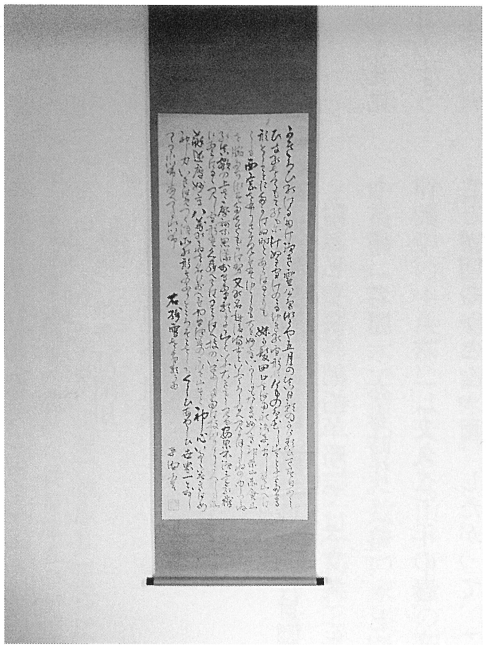


図13. 全紙条幅一巻135.6×49.7（本紙）

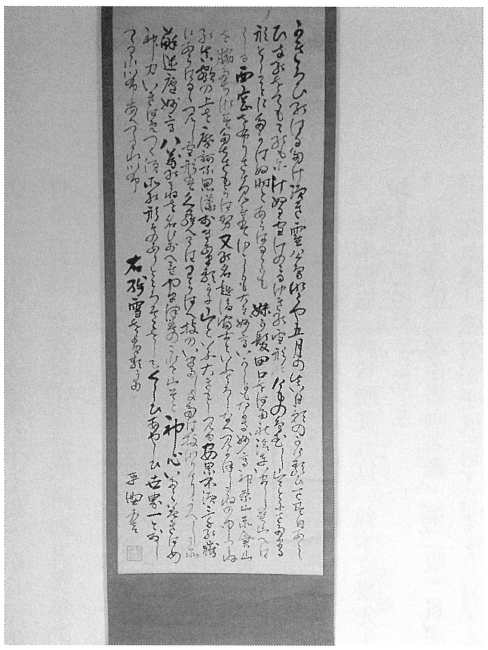


図14. 図13 拡大図

図13、14は、平成29年8月19日（土）
槇田撮影。同日サイズ計測。単位はcm。